

第一章 「食」豊かな紀の川市

（一）「食」豊かな紀の川市

最近、「食育」という言葉を聞く機会多くないですか？

食育という言葉は、明治時代に石塚左玄^{さげん}という軍医で食養家の方が提唱し、当時のベストセラー作家だった村井弦斎^{げんさい}が広めたものといわれています。

いわく、「知育、徳育及び体育の基礎となるべきもの」、「食」に関する知識と『食』を選択する力を習得し、健全な食生活を実践することができる人間を育てる」……平成一七年に成立した食育基本法の前文に書かれている理念なのですが、少しかたくるしい感じは否めません。私自身は、「食」を通じて「命」の大切さを学ぶことを「食育」と理解しています。

平成一九年四月、農林水産省から紀の川市に赴任して感じたのは、市内のあちこちで見られる「食」

の豊かさです。季節ごとにたわわになっていく桃、いちじく、柿、はつさくなどの果物、たまねぎ、ねぎ、きゅうりなどの野菜。家や職場で身近に私たちの命の基礎となる「食」があふれ、めつけもん広場などの直売所に行けば、新鮮で安い果物・野菜が手に入ります。

世界ではじめて全身麻酔薬による乳がん手術に成功した医聖・華岡青洲^{はなわかせいしゅう}の顕彰施設「青洲の里」では、地場野菜中心の健康バイキングを食べることが出来ます。

コンクリートやアスファルトに囲まれた都会の生活に慣れていた私の子ども達も、身近にあふれる「食」に大喜びでした。

こういった紀の川市の「食」に関する取組を市のPRにも活用できたらいいのにと考えました。

(二)「合併市」紀の川市

紀の川市は、平成一七年一月に合併してできた新しい市です。和歌山県の北部に位置し、北は大阪府、西は和歌山市に接しています。関西国際空港から、車で一時間圏内という利便性もあります。

紀の川や貴志川という清流と周辺に広がる平野、和泉山脈や紀伊山地といった山間部など豊かな自然に恵まれています。

人口は約七万人で、和歌山県で三番目の人口規模です。

新市になってから、紀の川市の京奈和自動車道・打田IC（予定）から泉佐野市の阪和自動車道・上之郷ICを直結する「紀の川関空連絡道路」を国の直轄道路として要望しています。京都・奈良方面から関西国際空港まで最短距離でつなぐこの道路が実現すれば、関西経済の活性化や産業・文化の進展に



紀の川市位置図

豊かな自然と大阪にも近い利便性をあわせもった紀の川市。合併して間もないため、ブランド力の強化が課題です。

大きく寄与すると考えられます。

平成二〇年に策定した長期総合計画では、「いきいきと力をあわせたまちづくり 夢あふれる紀の川市」を将来像に掲げ、「協働」^{きょうどう}「人づくり」「基盤づくり」「環境づくり」「行財政」という5つの政策目標のもとでまちづくりを進めています。

市民との「協働」については、新市になってから特に力を入れている分野です。桃山まつり（四月）、粉河まつり（七月）、市民まつり（八月）、青洲まつり（一〇月）、産業まつり（十一月）という紀の川市を代表する五つのまつりは、実行委員会形式の市民主導のまつりとして定着しつつあります。

旧町時代は行政主導であったまつりが、市民主導

市民まつり

毎年8月に開催される「市民まつり」は、紀の川市を代表するまつりです。公募した実行委員会が主体となった市民主導のまつりとして定着しつつあります。



となることによって、市民自ら紀の川市の活性化を考えてもらえる体制づくりが進んでいます。各まつりでは、市職員もボランティア参加するなど市民と市職員の「協働」の取組がはじまっています。

赴任もないころ、田村武副市長や市長公室の皆さんと細野溪流キャンプ場にホテルを見にいったことがあります。紀の川市の中心部から小一時間かかる山間地にあるところです。

幻想的なホタル

の美しさには心奪われるばかりでしたが、紀の川市にこのように美しい自然が残されている山村があること



細野溪流キャンプ場

キャンプ場にはバンガローやオートキャンプ場が完備。川遊びなども楽しめます。
問い合わせ：0736-67-0070

にも新鮮な感動を覚えました。

東京などの大都會では決して見ることでできない美しい自然を市内の随所で味わうことができるのも、「合併市」紀の川市の魅力ではないでしょうか。

実は、私が二〇代に市町村交流で赴任した鹿児島県末吉町も近隣二町と合併して曾於市となっていました。市町村合併の様々な課題について考えさせられることが多くあり、「合併市」紀の川市への赴任が決まったとき、ひそかに運命的なものを感じました。合併市のまちづくりに関しては、第六章（一）『紀の川のほとり』で「合併市」紀の川市の現場から、詳しく紹介していますのでご覧ください。

（三）「果物王国」紀の川市

紀の川市は、和歌山県下第一の農業生産高を誇り、西日本一の果樹生産市です。例えば、いちじくとはっさくは全国一位の生産高、桃は二位、柿は三位、キ

ウイフルーツは四位（平成一七年）となっているなど、バナナとパイナップル以外は何でもとれる「果物王国」といえます。

しかし、紀の川市でも、農産物価格の長期低迷などを背景に、農業の担い手不足が深刻です。その結果、市内の農地の約一割が耕作放棄地になっており、対策が急務です。

このため、平成一九年、JAや農業委員会などを構成員とする担い手育成総合支援協議会を立ち上げ、担い手対策、耕作放棄地対策、農業基盤の整備を総合的に行うことにしました。

紀の川市の農業を活性化させるためには、まず、その担い手がいなくてはなりませんし、担い手が安定した農業を経営していくためには、水路や農道など条件が整った優良な農地が必要です。また、耕作放棄となっている農地は、基盤整備を行い農地の条件を整備しなければ耕作してもらえない担い手はいま

せん。全ての取組が総合的・有機的につながることで、相乗的な効果が発揮されます。

(四) 農産物の販売力強化

市内の農家の元気が出る源は、やはり農産物の「価格」が安定的に高値をつけることです。このため、紀の川市では、ＪＡ紀の里などと協力して販売力の強化に取り組んでいます。

第一が、紀の川市でとれた農産物を紀の川市で消費してもらう「地産地消」の強化です。

紀の川市には、ＪＡ紀の里「めっけもん広場」という日本一の売り上げを誇る農産物直売所や地場農産物を活用した健康バイキングで有名な「青洲の里」があります。また、小中学校では地場農産物を使った学校給食も有名です。こういった地産地消の取組を強化することで、市内での地場農産物の販売

を促進します。

第二が、農産物の市外への販売力の強化です。

平成二〇年から紀の川市産農産物の「トップセールス」を行っています。紀の川市長とＪＡ紀の里の組合長という、行政とＪＡのトップが自ら大都市圏に紀の川市産農産物を売り込みにいくものです。

平成三二年度には、七月に桃（大阪）、九月にいちじく・柿（東京）、二月にキウイフルーツ・はっさく（横浜）のトップセールスを行いました。

トップセールスで紀の川市産農産物の「味」だけでなく「心」を消費者に届けることができればと考えています。



トップセールス

トップセールスで、紀の川市産農産物の「味」だけでなく「心」を消費者に届けることができればと考えています。

す。

また、最新の糖度センサー等をそなえた流通センターを三箇所再編整備しました（農産物流通センター・東部流通センター・西部流通センター）。最新式の流通センターの存在は、市場への販売力の大幅な強化につながっていくと考えています。

平成二二年九月からJA紀の里で黄色いキャンペーンカーを導入しました。紀の川市産



黄色いキャンペーンカー

おいしさをぎゅっとつめこんだ黄色いキャンペーンカー。あなたのまちに紀の川市の「味と心」を届けます。



農産物流通センター

流通センターの整備が消費者のニーズに的確に対応する機動力をもたらしてくれました。

農産物の「味と心」を消費者の皆様へ直接届けるべく全国を走り回っています。皆さんの町で黄色いトラックを見かけたら、ぜひお立ち寄りください。

海外への輸出についても、台湾、シンガポール、香港などに紀の川市産の桃や柿の販売を行っている実績があります。

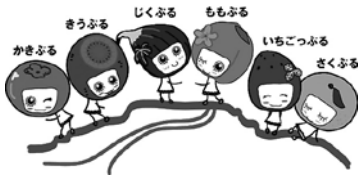
紀の川市が関西国際空港から一時間圏内という他の産地と比べて圧倒的に有利な利便性を考えれば、今後のビジネスチャンスは大きいと考えています。

平成二〇年一二月、中国上海の食品関連見本市にJA紀の里と紀の川市で「あんぽ柿」を出品するなど輸出促進にも力を入れています。今のところ中国にはなし・りんご以外の果物は輸出できない状況ですが、柿の加工品で、中国人好みのとろりとした甘さのある「あんぽ柿」には商機があると考えられます。実は、紀の川市では明治期から昭和三〇年代まで、みかんなどを北米に輸出していたことがあります。

ただ、今後の海外輸出に関して流通段階での品質保持の問題など課題は多く、継続的に研究を続けていくことが必要です。

第三が、紀の川市ブランドの確立に向けた取組です。紀の川市の農業の素晴らしさに市民が誇りをもってもらうとともに市外にも情報発信をしていくためのツールとして、紀の川市特産の果物のキャラクター「紀の川ぶるぶる娘」が誕生しました。

六人の姉妹で、それぞれ、じくぶる（いちじく）、さくぶる（はつさく）、ももぶる（桃）、かきぶる（柿）、きうぶる（キウイフルーツ）、いちごっぶる（いちご）という名前も



紀の川ぶるぶる娘

「紀の川ぶるぶる娘」は6人姉妹。Tシャツやシールなどのグッズのほか、テーマソングや着ぐるみも大人気です。

もっています。紀の川市特産の果物のみずみずしさを表しているということで、全国三、四五十件の応募の中からこの名前が選ばれました。紀の川市ブランドの確立に向けて、このキャラクターを大いに活用していきたいと考えています。

なお、食育と農産物の販売強化を進めるために、『紀の川ぶるぶる娘の歌』という歌をつくりました。第七章で詳しく紹介していますので、ご覧ください。付属CDでも歌をお楽しみいただけます。

（五）食育のまちづくり

紀の川市の「食」を考えたとき、一年中果物が何でもとれる恵まれた農業、地産地消の拠点である「めっけもん広場」、地場野菜を中心とした健康バイキングを提供している「青洲の里」など、食育に関わる豊富な素材があります。

教育分野においても、市内の小中学校で、地元の

農家と連携した給食づくりを展開するなど先進的な取組が見られます。

このため、紀の川市では、平成二〇年九月、農業の振興や地産地消をベースとした紀の川市食育推進計画を策定しました。

計画策定とあわせ、平成二〇年二月より、紀の川市食育フェアをはじめました。平成二三年二月で四回目を迎えますが、食育の啓発や料理体験、シンポジウムの開催など、毎年、内容の充実が図られています。

食育推進計画と食育フェアについては、第三章で詳しく紹介していますので、ご覧ください。

平成二一年度には、国の助成事業「地方の元気再生事業」に取り組みました。

紀の川市が医聖・華岡青洲の生誕地であることを踏まえ、医・食・観光の連携による「食育のまちづくり」をメインテーマとして、次の三つの取組を進

めました。

第一は、食育のまち推進事業です。地場農産物を中心とした「食育メニュー」の開発のほか、米粉をつかった食育創作料理コンテストの開催、食育研修会を行いました。

第二は、食育のまち啓発普及事業です。小中学校や保育所での食育に関する教育素材（カルタ・紙芝居・DVD）の開発や食育に関するシンポジウムを開催しました。

第三は、食育のまち宿泊体験交流事業です。食育や健康にこだわった宿泊体験プログラムの開発や農家の語り部研修などを実施しました。

事業終了まで、市役所をはじめJA紀の里、(財)青洲

紀の川市の食育の取組推移

H 20	食育フェア、紀の川市食育推進計画
H 21	地方の元気再生事業
H 22	「食育のまち」宣言
H 22～24	「わがまち元気プロジェクト」

紀の川市では、順次「食育のまちづくり」を進めてきました。

の里などの団体に精力的に事業に取り組んでもらった結果、首相官邸ホームページで最高のAという評価をいただきました。

地方の元気再生事業については、第四章で詳しく紹介していますので、ご覧ください。

事業仕分けで地方の元気再生事業が廃止となり、次年度の事業につなげることができなかったのは残念ですが、この事業で作成した食育関係の素材は、その後、紀の川市で食育を推進していく上で貴重な財産となりました。

(六)「食育のまち」宣言

平成二〇年の食育推進計画の策定にはじまり、食育フェアの開催、地方の元気再生事業と、紀の川市の食育の取組は、年々充実が図られてきました。その一つの集大成として、平成二二年十二月、紀の川市議会で「食育のまち 紀の川市」宣言が議決され

ました。これは、近畿初の「食育のまち」宣言となります。また、平成二二年度から二四年度まで、和歌山県の「わがまち元気プロジェクト」事業の採択を受け、紀の川市の食育を観光や加工などの産業化に結びつけていく予定です。

「食育のまち」宣言と「わがまち元気プロジェクト」については、第五章で詳しく紹介していますので、ご覧ください。

紀の川市の「食育」の取組をこの後の章で詳しくお伝えします。

「食育のまち 紀の川市」宣言 推進の柱

- 1 食事はおいしく、楽しみながらとりましょう。
- 2 生活リズムを整え、バランスのとれた食生活習慣に心がけましょう。
- 3 食の安全に対する知識を身につけましょう。
- 4 紀の川市でとれた食材を活用しましょう。
- 5 食育への関心を深めましょう。

平成 22 年 12 月、紀の川市は、近畿初の「食育のまち」宣言を行いました。

・インタビュー・

紀の川市長

中村 慎司さん



—紀の川市のまちづくりについての想いは？—

紀の川市では、平成 17 年の新市発足以来、旧 5 町のバランスにも配慮しながら安全・安心なまちづくりを行ってきました。紀の川市は大阪からも近く豊かな自然も残っているので、車で来て頂ける方も多いと思います。このため、泉佐野打田線はじめ道路の整備を進める必要があります。

—紀の川市の農業を元気にする方策は？—

紀の川市は、バナナとパイナップル以外何でもとれる「果物王国」といえるところです。しかし、紀の川市でも農家の高齢化や後継者不足が大きな問題になっています。農業は天候に大

きく左右されますし、国策による輸入自由化などの影響を受けて、農産物価格は下落し続けています。基幹産業である農業に元気を出してもらわなければなりません。

市としても、トップセールスなど紀の川市産農産物の販売力強化を進めていますが、これからも、JA 紀の里と一緒に農業の活性化に取り組んでまいります。

将来の農業を考えた場合、ほ場整備の推進も大切です。貴志川町では各地区ではほ場整備に取り組んでいましたが、今後、打田地区を中心とした紀の川流域でも取り組んでもらいたいと考えています。

—食育についての想いは？—

「食」は人の体にとって生きる基本となる大切なものです。紀の川市でとれた安全・安心な野菜・果物を地域で活用する「地産地消」を進めるなど、これからも「食育のまちづくり」に取り組んでいきたいと考えています。



紀の川流し雛